

はじめに……………並木誠士……………iv

第I部 制作

浅井忠とパリ——近代日本における芸術家の転身をめぐる考察……………並木誠士……………3

木島櫻谷の写生縮模帖——近代京都における日本画の学習と制作……………実方葉子……………27

太田喜二郎研究——その画業と生涯……………植田彩芳子……………53

河井寛次郎と京焼の生産システム——登り窯を「受け継ぐ」意味……………木立雅朗……………93

京都における染織工芸の近代化……………青木美保子……………125

——写し友禅・機械捺染・墨流し染

水曜会をめぐる考察……………上田文……………155

——竹内栖鳳塾における明治三〇年代後半の新動向

『小美術』——その分析と西川一草亭の果たした役割……………和田積希……………189

京都市立美術工芸学校の教育課程……………松尾芳樹……………243

第Ⅱ部 流通

美術貿易黎明期の京都とロンドン……………山本真紗子……………271

——美術商池田清助とトーマス・J・ラーキン

谷口香嶠の模写と画譜出版……………藤本真名美……………293

雑誌『時事漫画 非美術画報』にみるカリカチュアと凶案……………前川志織……………317

明治期京都における染色デザインの展開……………加茂瑞穂……………351

——友禅協会応募凶案を中心に

明治期京都における教育機関への海外デザインの導入……………岡 達也……………373

——凶案集を中心として

第Ⅲ部 鑑賞

小波魚青「戊辰之役之図」と明治維新観……………高木博志……………403

雑誌にみる近代京都の美術工芸……………中尾優衣……………417

——黒田天外の『日本美術と工芸』をめぐって

京都商品陳列所と明治末京都の美術工芸……………三宅拓也……………445

土田麦僊の画室建設と材木商塩崎庄三郎……………田島達也……………479

武徳殿の建設と国風イメージの波及……………中川理……………519

茶会の場の考察……………矢ヶ崎善太郎……………541

あとがき

索引

英文要旨

執筆者紹介

美術工芸からみる近代京都の特性

日本近代の美術工芸についての研究が本格化するのには、比較的近年になってからである。ひと昔前には、日本の近代美術を扱う講座が大学で開講されることは稀れであった。学会での発表についても同様である。

日本の近代美術についての本格的な研究は、一九八四年成立の「明治美術研究学会」（現明治美術学会）と一九八九年に刊行された北澤憲昭『眼の神殿』（美術出版社）を嚆矢として、佐藤道信『日本美術の誕生 近代日本の「ことば」と戦略』（講談社、一九九六年）、同『明治国家と近代』（吉川弘文館、一九九九年）など一九九〇年代に活発になった。そこでの中心的な関心事は、明治政府の方針として、「美術」やそれを取り巻く諸制度が整備されてゆく過程の検証であり、そのことと現代の美術史研究とのかかわりであった。そして、そうである限り、話題は明治政府⇨東京を舞台とする傾向が強かった。また、同時期には、国公私立さまざまな美術館・博物館で近代美術を主題とする展覧会が開催されるようになる。このように、一九九〇年前後より、わが国では近代美術を研究の俎上に載せる準備が整ってきたといえる。

一方で、京都の近代が東京とは異なる独自のあり方を示していたことも、徐々に明らかになってきた。近代化の様相が地域により異なっていることは言うまでもないが、京都の場合は、さまざまな側面で独特の近代を迎えている。その最大の要因は、「天皇」の存在、あるいは不在である。明治二年（一八六九）に、京都では「東幸」

と呼んだ東京遷都が敢行されて天皇は東京に行く。天皇を中心とする公家社会が、京都の伝統的な美術工芸の重要な注文主であったことは明らかである。そして、京都のまちを支えているのも、伝統工芸の担い手たちであった。彼らが経験した天皇の不在という近代は、いまのわれわれが思う以上に大きな意味をもっていた。これは他の地域が経験することのない近代であった。

また、「みやこ」として美術工芸を長く育んできたことも京都の特徴と言えるだろう。長い時間をかけてさまざまな美術工芸が形成されてきたということは、美術工芸の仕組み、つまり、それをめぐる制作や流通、鑑賞のシステムが強固に確立していることを意味する。技術の伝統や職種間のネットワークが強固であればこそ、近代を迎えたとき、機械化や化学染料の導入に際して大きな抵抗があったことは想像に難くない。そして、それだからこそ、「東幸」の危機感のなかで、京都では東京に先んずるかたちで、美術工芸の学校の設立や博覧会の開催などさまざまな施策が打ち出されていったのだ。

天皇の「東幸」にあたり、明治政府から京都府へ勸業基金として二五万円が交付される。これは伝統工芸の維持をおもな目的とするものであり、このことから「東幸」と伝統工芸の密接な結びつきがわかる。これを受けて京都府は同年に勸業掛を設置し、また、西陣織の振興を目指して西陣物産会社を設立した。

明治三年には、大阪にあった理化学の教育・研究機関である舎密局せいみつに倣い、京都にも舎密局を設置して、本格的に新しい知識に対応する体制を整える。舎密局では、石鹼やビールなどの製造のほか、伝統工芸に直接かかわる分野として化学染料の開発や油薬の研究などがおこなわれた。この舎密局で、明治一年から指導にあたったのがドイツ人ゴットフリート・ワグネル (Gottfried Wagner, 1831-92) である。

一方で、この時期には、陶芸や染織に携わる若い職人が伝習生としてヨーロッパに派遣されている。具体的には、明治五年に、佐倉常七・井上伊兵衛・吉田忠七らが西陣からフランスのリヨンへ派遣されて紋織技術の修得、

最新織機の買い付けをおこない、明治六年には 佐倉・井上がジャカードやバツタンといった織機を購入して帰国する。同年には、明治政府がはじめて参加したウィーン万国博覧会が開催されるが、このときにはワグネルの周旋により伊達弥助・早川忠七らが西洋織法の学習のために、丹山陸郎が洋式製陶法の学習のために派遣された。明治一〇年には、稲畑勝太郎（染色）・近藤徳太郎（織物）・佐藤友太郎（窯業）ら八名の研修生が派遣される。彼らは、いずれも帰国後には工場長など指導的な役割を果たす。ワグネルは、このような研修生派遣の手伝いをするだけでなく、博覧会への出品や陶磁器の輸出に対しても助言をおこなっている。また、彼らもたらした新しい機械や技術は、明治四年の京都博覧会以来、毎年おこなわれる博覧会でも披露された。

染織に関しては、舎密局とともに染めや織りの工場である染殿（さゐのどの）、織殿（おりどの）をつくり、やがて、明治二〇年に、日本最初の絹織物の近代的大規模工場である京都織物会社が織殿の旧地（河原町二条下ル）に創設される。ここでは、撚糸・染色・織物の一貫生産をおこない、その経営には近藤徳太郎・稲畑勝太郎ら海外研修生が参加した。明治二三年には、荒神口に新工場を設立して、そこに最新の動力織機を設置するが、やがて経営不振に陥る。しかし、この時期に京都の染織界には美術織物という新しい道が開かれることになる。

一方、陶芸に関しては、明治初期には錦光山宗兵衛の粟田口焼を中心に輸出陶器が好調であり、とくに、幕末期からヨーロッパで人気のあった薩摩焼が西南戦争で生産量が落ちたことにより、京都では薩摩風の陶磁器を製造し、それは「京薩摩」として海外で好評を博した。明治一〇年代までは海外への輸出が好調であり、明治二〇年には京都陶器会社を設立してさらなる輸出体制の強化をおこなうが、皮肉にもこの頃から海外での評価が急激に落ちることになる。

明治二〇年代には、海外輸出においてだけではなく、国内でも、内国勸業博覧会の場合などにおいて、京都の工芸品の評価が落ちる。京都の工芸が進取の気概に乏しく、旧態依然としているという点、とくに模様の陳腐さが

指摘された。そこで、工芸の改善を目指して、明治二三年には京都美術協会を設立して『京都美術協会雑誌』誌上で図案指導をおこなう。この時期に、伝統的なものではない新しい図案がさかんに模索された点は、京都の近代の特徴のひとつとして記憶されるべきである。明治一三年に開校した京都府画学校には、同二年に応用画学科ができ、組織が改編されるなか、同二七年に京都市美術学校工芸図案科となり、やがて後進の京都市美術工芸学校に図案科が設置される。翌明治三五年には京都高等工芸学校が図案科・色染科・機織科の三科で開校する。新しい原料・機械に対応するとともに、新しい図案を教授することが目的であった。この時期には、在野でも図案集がさかんに刊行されるほか、明治二四年には高島屋帛紗図案募集が、翌二五年には友禪図案会図案募集がおこなわれる。このように、明治時代の後半は、さまざまなかたちで「図案」の刷新が目指されていた。

そして、明治二八年には、第四回内国勸業博覧会が岡崎で開催される。平安遷都千百年記念祭と同時開催であった。歴史のある「古都」京都を示すことにより、日本が長い歴史と文化を有する国であるということの世界にアピールした。このときに、市街電車が七条・岡崎間に開通し、その他、道路・鉄道網の整備、衛生環境の改善、旅館の整備などがおこなわれ、観光都市化が進むことになる。これもまた東京とは大きく異なる点である。しかし、この博覧会でも京都の工芸は不振で、翌二九年には陶磁器試験場を設立し、陶磁器図案の改良につとめる。明治三二年には、図案改良のための研究団体として陶磁器奨励会が、さらに同三六年には遊陶園が設立されて、新しい図案による制作が進められる。このような図案指導の強化も、近代京都の特質のひとつである。

京都における美術工芸を支える学校としては、前述の、明治一三年に開校した京都府画学校がある。これは、明治二二年開校の東京美術学校より早い。東京が「美術学校」であったのに対して京都は「画学校」である点特徴的である。友禪染・京焼など京都の伝統工芸はいずれも絵画的な意匠に特徴があるため、「絵」(≡画)の描ける職人の養成が必要であった。このように地元産業界からの要請で美術工芸専門の学校が設立されるという

点もまた近代京都の特徴である。これは、明治三五年に開校した京都高等工芸学校でも同様である。同校の場合も、京都市の有志からの「工芸ヲ教授スル官立学校ノ一ヲ市ノ内外ニ設置」して欲しいという要望を契機として、設置されることになる。同校の初代校長となった中澤岩太は、化学者であり、その知識は伝統工芸の近代化にとって不可欠であった。

さらに、京都の近代を特徴づけるのが博覧会である。明治四年一〇月には、日本で最初の博覧会である京都博覧会が西本願寺大書院で開催される。翌年東京で開催された文部省博覧会に先立つ開催である。同年には京都博覧会社が設立されて、勸業政策を推進するための組織として、積極的に博覧会の開催を進め、翌五年に第一回京都博覧会を開催。以降、ほぼ毎年博覧会を開催してゆく。明治六年の第二回には京都御所が会場とされており、第一〇回（一八八一年）以降は御苑内に開設された京都博覧会場で開催されている。内国勸業博覧会の会場内の美術館は、博覧会終了後に京都市に払い下げられ、しばらくは美術館として機能するが、やがて勸業館的な役割にとって替わられることになる。なお、明治三〇年には帝国京都博物館が七条に開館し、同四二年には博覧会の地岡崎に京都商品陳列所が開設された。

以上のように、近代の京都の動きは、東京と比較をしても特徴的であるが、このような近代の特性について、これまで十分に研究がなされてきたとは言えない。とはいえ、二〇〇〇年以降の近代京都研究の高まりのなかで『近代京都研究』（高木博志ほか編、思文閣出版、二〇〇八年）、『みやこの近代』（同上、二〇〇八年）などが共同研究の成果として刊行された。また、美術工芸についての個別の研究もいくつか報告されるようになり、近代京都の諸相をヴィジュアルに示す展覧会も徐々に開催されるようになった。

近代京都に関する最初のまとまった展覧会は、京都府京都文化博物館で一九八八年に開催された「気球があがった——近代京都の一世紀」である。歴史中心であるとはいえ、美術工芸にも十分な目配りを行っている好企画

であった。また、京都国立近代美術館「京都の工芸 一九四五―二〇〇〇」(二〇〇一年)は幅広いジャンルで基準作となる作品を網羅した展覧会で、作者情報なども貴重である。同じ近代美術館の「京都学 前衛都市モダニズムの京都展 一八九五―一九三〇」(二〇〇九年)は、第四回内国勸業博覧会以降の京都の近代化の様相を明らかにする。同館の「うるしの近代―京都、「工芸」前夜から」(二〇一四年)は、漆芸の近代に特化した展覧会で、新しい資料とともに豊富な作品を呈示した。このように、おもに二〇〇〇年以降にさまざまな面で近代京都研究がさかんになったと言つてよいだろう。

私自身は、本書の執筆者とともに、京都工芸繊維大学美術工芸資料館で、浅井忠や武田五一あるいは、近代京都の染織・陶芸さらには図案に関する展覧会を実施し、また、その知見を『京都 伝統工芸の近代』(並木誠士・青木美保子ほか、思文閣出版、二〇〇九年)、『図案からデザインへ 近代京都の図案教育』(並木誠士・松尾芳樹・岡達也、淡交社、二〇一七年)、『京都 近代美術工芸のネットワーク』(並木誠士・青木美保子編、思文閣出版、二〇一七年)などにまとめた。本書は、そのような研究や展覧会の積み重ねを踏まえて科学研究費(B)「近代京都の美術工芸に関する総合的研究―制作・鑑賞・流通の視点から―」として助成を受けて、あらたに組織した共同研究の成果の一端である。

本書の構成と視座

本書では、近代京都の美術工芸を共同で論じるにあたり、制作・流通・鑑賞という視座を設定した。ここでは、具体的に収録論文を紹介しながら、それぞれのテーマにおける問題の所在を確認してゆきたい。

第I部は美術工芸の「制作」をめぐる諸問題を扱っている。

並木誠士「浅井忠とパリ——近代日本における芸術家の転身をめぐる考察」は、東京美術学校の教授から、一九〇〇年のパリ万国博覧会視察を経て明治三五年に京都高等工芸学校図案科の教授として赴任することになる浅井忠（一八五六―一九〇七）の、ある意味で転身と言ってもよい変化の理由をパリでの体験に求める。早くから洋画を志して「近代」を先取りしていると自負していた浅井が、西洋画の本場に行き、みずからの表現に絶望したことを確認しつつ、アール・ヌーヴォー全盛のパリで見た図案制作にあらたな近代的側面を見出したことこそが、転身の要因であったと分析する。

実方葉子「木鳥櫻谷の写生縮模帖——近代京都における日本画の学習と制作」は、近代京都で活躍をした日本画家木鳥櫻谷（一八七七―一九三八）が残した「写生縮模帖」（公益財団法人櫻谷文庫蔵）の全貌を詳細に紹介することを通して、今尾景年に師事した初期段階からの櫻谷の絵画修業の過程を明らかにする。この作業を通して、当時の京都における運筆重視の指導や如雲社などの場を利用した新古画の縮模の様相、そして、なによりも写生を積極的に起こす櫻谷の姿勢を論じる。また、モチーフとしての虎を例に、本画制作にいたる表現の変化を示し、結果として櫻谷が本画制作の段階で写実表現を意図的に抑制している点が指摘される。

植田彩芳子「太田喜二郎研究——その画業と生涯」は、近代京都の洋画壇で活躍した太田喜二郎（一八八三―一九五二）の、東京美術学校時代・ベルギー留学時代を経て京都で活動するようになって以降の年譜的な事項を丁寧に確認し、そこに画風の展開を重ね合わせる。そのうえで、作風の分析や歴史学者・考古学者・哲学者などのネットワークの様相を明らかにする。太田については、これまで体系的な研究がなされておらず、本論文は今後の研究の基礎となる貴重なものである。

木立雅朗「河井寛次郎と京焼の生産システム——登り窯を「受け継ぐ」意味」は、陶芸家河井寛次郎（一八九

〇（一九六六）の言説をたどり、河井の京都や戦争とのかかわりを掘り下げる。道仙化学陶器所文書、藤平陶芸文書の精査を通して、登り窯の衰退や貸し窯の実態、五条坂における民藝陶器制作の様相などを明らかにする。そして、最後に、窯の廃絶など現代社会において近代美術工芸遺産が直面している問題に言及する。

青木美保子「京都における染織工芸の近代化——写し友禪・機械捺染・墨流し染」は、京都の染織業界が伝統的な製法から徐々に近代化する過程を詳細に追跡する。具体的に取らなければならないのは、写し友禪・機械捺染・墨流し染であり、ここでは、中村喜一郎、廣瀬治助、堀川新三郎、太田重太郎、武田周次郎、八木徳太郎などこれまで無名の個人としてしか扱われていなかった技術者、企業主などが人間として浮かびあがってくる。美術史のみならず技術史、産業史とも捉えることができる論考である。

上田文「水曜会をめぐる考察——竹内栖鳳塾における明治三〇年代後半の新動向」は、日本画家竹内栖鳳（一八六四～一九四二）門下の画家グループが結成した「水曜会」（一九〇三～〇七年）の実態をはじめて明らかにしたもので、栖鳳と弟子たちとの関係や、相互の制作をめぐるやりとりが明確になった。そのなかで、西洋美術受容のあり方、東京との比較意識など、グループが京都画壇確立の方向性を先駆的に試みた様相が示される。機関誌『黎明』の分析、展覧会出品作品の分析もおこなう。

和田積希「『小美術』——その分析と西川一草亭の果たした役割」は、杉林古香（一八八一～一九二三）、津田青楓（一八八〇～一九七八）、西川一草亭（一八七八～一九三八）という若い同人三人が結成した「小美術会」とその発行誌である『小美術』（一九〇四年）を詳細に分析して、同誌を、若い三人が京都の伝統工芸界に突きつけた挑戦状と位置づける。また、三人の図案観や浅井忠とのかかわりを論じたうえで、美術家とは一線を画する華道家としての西川一草亭の立ち位置を明らかにする。『小美術』の特質には一草亭が大きな位置を占めていると同時に、その熱意が早期の廃刊の引き金になったと指摘する。

松尾芳樹「京都市立美術工芸学校の教育課程」は、京都の産業界や行政の期待を受けて、明治一三年に開校したわが国最初の公立絵画学校である京都府画学校から京都市美術工芸学校への教育課程の変遷を追いながら、そのなかで「図案」が次第に重要視されてくる動きを指摘する。そのうえで、近代京都の美術教育が学校（教養）と画塾（専門）によって推進されたという特性を指摘して、東京との相違を明確に示す。

第Ⅱ部は美術工芸の「流通」をめぐる問題を扱う。

山本真紗子「美術貿易黎明期の京都とロンドン——美術商池田清助とトーマス・J・ラーキン」は、美術商として著名な山中商会以前に、海外との交流をもった池田清助（初代 一八三九～一九〇〇・二代 一八六一～一九一八）とその周辺にいた稲田賀太郎（一八六八～？）およびトーマス・J・ラーキン（一八四八～一九一五）という二名の事績を克明に追跡することにより、明治・大正期における日本美術の海外への流通の実態を明らかにする。とくに、電気技師としてイギリスから雇い入れた「お雇い外国人」であり、帰国後に美術商となったラーキンの業績を具体的に紹介するはじめての試みである。

藤本真名美「谷口香嶠の模写と画譜出版」は、日本画家であり、また、図案制作に注力した谷口香嶠（一八六四～一九一五）の工芸図案についての考え方を、古器物の図案集出版に着目して論じる。最初の画譜『工芸図鑑』（一八九一年）以来、香嶠が積極的に進め、その特徴ともなった古代模様の普及が、当時の図案集刊行の主目的であった工芸図案の改良に加えて、東京に比べて振るわなかった京都の歴史画への参考資料の提示という側面が強かったという重要な指摘がなされる。

前川志織「雑誌『時事漫画 非美術画報』にみるカリカチュアと図案」は、洋画家であり、浅井忠について関西美術院の院長になった鹿子木孟郎（一八七四～一九四一）が中心となって創刊した『時事漫画 非美術画報』（一

九〇四年）を分析する。この雑誌の詳細な報告自体がこれまでなかったが、それだけでなく、この雑誌で展開される戯画的表現が図案へと展開していることを的確に指摘している。

加茂瑞穂「明治期京都における染色デザインの開眼——友禅協会応募図案を中心に」は、京都における最初期の図案団体であり、図案家の育成もおこなった友禅協会（一八九二年）が実施した図案募集の様相を明らかにし、それを通して、この組織の特色を読み解き、そこから近代京都の図案のあり方を考える。とくに近年発見された入選図案を紹介して、京都市立美術工芸学校や京都高等工芸学校という教育機関でそれらが図案指導に活用されていた可能性を示唆する。

岡達也「明治期京都における教育機関への海外デザインの開眼——図案集を中心として」は、京都高等工芸学校が明治三五年に開校当初から購入していたヨーロッパの図版および図案集に着目をして、それらの図案や情報が行き渡る過程と、どのように受容されたかを分析する。海外デザインの導入と図案科のカリキュラム、とくに模写教育とのかかわりが指摘される。海外の図版および図案集の受容についてはいまだ詳細な研究がなされておらず、本論文はその端緒となるものである。

第Ⅲ部は美術工芸の「鑑賞」をめぐる問題を扱う。

高木博志「小波魚青「戊辰之役之図」と明治維新観」は、近年発見された小波魚青（二八四四～一九一八）「戊辰之役之図」の画面を詳細に分析することによって、幕府擁護から討幕へと揺れる宇和島藩とその絵師小波の位置づけを明らかにする。それにより、この時期の微妙な歴史意識が明らかにされる。本論文における分析を通して、この絵を鑑賞するものが当時感じたであろう緊張感を追体験できるようにする。

中尾優衣「雑誌にみる近代京都の美術工芸——黒田天外の『日本美術と工芸』をめぐる」は、京都における

美術ジャーナリズムの代表的人物である黒田天外（生没年不詳）が編集・発行した『日本美術と工芸』（一九二一年）を紹介し、それが当時の工芸鑑賞のどのような点を浮き彫りにしているかを分析する。『日本美術と工芸』についてはじめての紹介論文である。ここでは、展覧会の問題、図案への関心などジャーナリストの目で捉えた当時の美術界の様相が示され、また、美術と工芸が渾然一体となっている京都の特殊性が明らかにされる。

三宅拓也「京都商品陳列所と明治末京都の美術工芸」は、明治四二年に設立された京都商品陳列所の意義と意味を分析し、それが他府県のものとは異なり、参考品を見せるだけではなく、制作指導もおこなうなど美術工芸寄りの活動をしていることが示される。また、併設された庭園に関して、京都の造園事業を示すものと位置づける。

田島達也「土田麦僊の画室建設と材木商塩崎庄三郎」は、京都市立芸術大学が所蔵する材木商塩崎庄三郎（一八七一～一九五〇）関係資料のなかから、土田麦僊（一八八九～一九三六）のアトリエ建設をめぐる手紙類を詳細に報告して、画家とパトロンの関係を鮮やかに浮かびあがらせる。とくに、小野竹喬、榊原紫峰との関係も含め、国画創作協会創立（大正七～一九一八年）前後の麦僊周辺の様相が示される。

中川理「武徳殿の建設と国風イメージの波及」は、明治三二年に大日本武徳会が藤原時代風で建設し、全国の武徳殿のモデルとなった京都の武徳殿が大正二年に改修された際に「桃山風」の要素が加えられたことを指摘する。そして、それまで支配的であった「藤原Ⅱ国風」に加えて、この時期に、桃山風の意匠が「もうひとつの国風様式」として建築に採用されるようになった実態を具体的に指摘する。

矢ヶ崎善太郎「茶会の場の考察」は、近代における茶室の変化、つまり、茶室の近代化の促進に美術商が大きな役割を果たしたことを指摘する。さらに、大正一〇年の東山大茶会の分析を通して、古民家の古材や石へのこだわりなど、美術商に加えて、大工や庭師もまた、この時期の茶室形成に重要な役割を果たしていたことが示される。

以上のように、本書は、明治・大正期の京都で制作・流通・鑑賞された絵画、工芸、建築、庭園さらには雑誌や書物など広範なジャンルを扱う。これらの論考を通して、近代京都の美術工芸をめぐる状況がある程度明らかになったと考えている。本書の視点をあらためてまとめると、以下のようなになる。

ひとつは、京都における近代化の様相を明らかにするために、太田喜三郎の基本年譜作成や「水曜会」、櫻谷資料、塩崎庄三郎資料など、多くの新出資料の紹介と分析を積極的におこなっている点である。さらに、これまで紹介・分析されてこなかった雑誌や短期間で廃刊になった雑誌、注目されることの少なかった図案集や図案募集などにも目を向けている。このことにより獲得された知見は大きい。このような新出資料・未紹介資料が多いことは、近代京都の美術工芸についての研究がまだまだ途上の位置にあることを示している。

本書のもうひとつの視点は、人的ネットワークの解明に力を向けている点である。化学者や技術者、パトロンや学者たちなど、美術史の文脈にはこれまでほとんど登場しなかった人びとが、美術工芸家をめぐるネットワークとして浮かび上がっている。

私たち執筆者は、いずれも京都をおもなフィールドとして調査・研究活動を続けている。京都で調査をしていると、近代の美術工芸についてまだまだ新しい作品や資料に出会うことが多い。それだけではなく、調査・研究の対象として貴重な作品や資料が廃棄されたり、破却されたりする現場に遭遇することすらある。十全な状態で保存・管理されているものの方が稀れかと思えるような状況にあって、われわれができることは、まず、そのような作品や資料の継続的な調査・研究であり、さらにそれらの正当な評価、位置づけをすることである。そのため、これからも近代京都の美術工芸に関心をもって、研究を続けてゆきたい。

あとがき

本書に収録した一九編の論文は、二〇一五～一九年度科学研究費基盤研究(B)「近代京都の美術・工芸に関する総合的研究―制作・流通・鑑賞の視点から―」(15H03169)の研究分担者および研究協力者の有志によるものである。

研究会での発表をまとめたものもあり、また、個別の調査の成果もある。いずれにしても、近代京都の美術工芸をさまざまな角度から分析しようとするものである。これらの論文により、京都において、伝統的な美術や工芸がさまざまな努力、工夫をして近代化を遂げてきた様相がすこしでも浮かびあがればと考えている。

最後にあたり、あらためて特筆しておきたいのは、本書には、これまで美術史研究、近代史研究の組上に載ってこなかった史料や文献、人物や作品が多く扱われているという点である。近代京都の美術工芸についての研究は、まだ緒についたばかりとも言える。このような資料類の発掘はこれからも続けてゆかなければならないと考えている。

同時に、もうひとつ強調しておきたいのは、近代京都の美術工芸についての資料類、さらには作品や制作に必要な道具類などが、この数年で急速に失われてきているという現状である。近代化のために必要であった資料や道具類は、関係者の世代交替やコンピュータの導入に象徴される「現代化」により一気に過去の遺物として廃棄されるような状況になっている。このような危機的な状況に対しても、私たちは対処しなければならぬと考えている。本書が、そのような動きの端緒になれば幸いである。そして、このことは、

「ここにちもあつた匠の技——機械捺染」(二〇一〇年)、「中澤岩太博士の美術工藝物語——東京・巴里・京都」(京都の墨流し染・糊流し染——その系譜と新たな可能性」(二〇一六年)、「纏う図案——近代京都と染織図案Ⅰ」(二〇一七年)、「掌のなかの図案——近代京都と染織図案Ⅱ」(二〇一八年、以上、京都工芸繊維大学美術工芸資料館で開催)など近代京都の美術工芸についての展覧会を実施してきたことにより、はつきりと自覚された。展覧会を見に来てくださった方々から資料や情報の提供をいただけたことは、二度や三度にとどまらない。本書にもその成果の一端は収録されている。そのことも含め、多くの方々に調査等でお世話になった。ここに、あらためて感謝したい。

また、執筆者のひとりでもある和田積希さんには全体を通して読んでもらい、最低限の表記の統一などをお願いした。思文閣出版の編集者大地亜希子さんには『京都 伝統工芸の近代』(二〇一二年)、『京都 近代美術工芸のネットワーク』(二〇一七年)に続きお世話になった。あらためて感謝したい。

最後になりましたが、本書の刊行にあたりまして公益財団法人鹿島美術財団の出版助成を受けました。著者一同より、心より感謝の意を捧げたいと思います。

二〇一九年春

編者 並木誠士

索引

【人名】

あ行	
明石染人(1887-1959)	147, 148, 153
明石博高(1839-1910)	127
浅井忠(1856-1907)	ix, x, xii, 3~6, 9~22, 47, 48, 58, 70, 71, 78, 79, 159~162, 164, 169, 180, 189, 191, 194, 195, 201, 202, 206, 213, 217, 221, 233, 234, 236, 293, 294, 302, 306, 310, 311, 317~320, 326, 330, 336, 338, 340~344, 375~378, 380, 384, 385, 390, 391, 396, 398, 424
アンダーソン, ウィリアム(1842-1900)	272, 273, 278, 280, 286
飯田新七(四代)(1859-1944)	356, 448, 455, 457, 464, 467, 469, 470
猪飼嘯谷(1881-1939)	201, 233, 251, 375
井口華秋(1880-1930)	156, 158, 160, 162
池田清助(初代・二代)(初代 1839-1900, 二代 1861-1918)	xii, 271~285, 455
池田有蔵(1864-1930)	470
池邊義象(1861-1923)	318, 320, 322, 330, 332, 333, 335, 337, 341
石井柏亭(1882-1958)	63, 64
伊東貞文(1853-1917)	256
伊藤草白(1896-1945)	485
伊東忠太(1867-1954)	523
伊藤快彦(1867-1942)	78
稲田賀太郎(1868-?)	xii, 272, 280~285
稲畑勝太郎(1862-1949)	vi, 128, 153
井野祝峰	107, 113, 114, 119
井上伊兵衛(1821-1881)	v

今泉雄作(1850-1931)	202, 215, 249, 295, 296, 303
今尾景年(1845-1924)	x, 27, 30, 33~40, 43, 44, 47~49, 161, 172, 191, 429, 430
入江道仙(三代)(1868-1946)	109, 114, 115
岩村透(1870-1917)	56, 78
上村松園(1875-1949)	36, 51
ヴェルヌイユ, モーリス・ピラール (1869-1942)	377, 385~387, 393, 395, 396, 398
内畠暁園(1874-1917)	156, 157, 160, 162, 166, 167, 169~171, 174, 179
梅原末治(1893-1983)	74, 87
大下藤次郎(1870-1911)	13
太田喜二郎(1883-1951)	x, xv, 53~84
太田重太郎	xi, 137
大野麦風(1888-1976)	485
大橋翠石(1865-1945)	50
大原孫三郎(1880-1943)	497
大亦観風	485
オールコック, ラザフォード(1809-97)	275
岡倉天心(1863-1913)	158, 171~174, 176, 196, 211, 250, 295, 411~413, 522
尾形光琳(1658-1716)	20, 200, 202, 278, 300
岡田紫郊	201, 228, 233
岡田信一郎	535
岡田朴亭	199, 201, 203, 209
岡本神草(1894-1933)	498
小川一真(1860-1929)	333
小川治兵衛(七代)(1860-1933)	449, 460~462, 469, 556, 564
小野竹喬(1889-1979)	xiv, 181, 481, 482, 485, 487, 490

か行

加藤源之助(1880-1946)	13, 79
金山藤兵衛	128
金子篤壽	145, 146, 466, 470
金子静枝(1851-1909)	356, 420
狩野直喜(1868-1947)	65, 69
鹿子木孟郎(1874-1941)	xii, 58, 79, 160, 161, 202, 233, 234, 317~330, 332~341, 343, 344, 464
神坂雪佳(1866-1942)	20, 194, 197, 198, 221, 228, 251, 259, 293, 294, 302, 306, 308, 310, 311, 322, 343, 356, 374, 375, 424, 462, 466
亀岡末吉(1865-1922)	527, 529, 531, 533, 534
河井寛次郎(1890-1966)	xi, 79, 93~119
河合惣之助	352
川北霞峰(1875-1940)	436
川島甚兵衛(二代)(1853-1910)	197, 202, 213, 220, 455, 456, 469, 470
河鍋暁斎(1831-89)	36
川之辺一朝(1831-1910)	194
河原徳立(1844-1914)	306, 314, 384, 457
川村文芽	228
川村多實二(1883-1964)	70, 71
川村曼舟(1880-1942)	436
菊池契月(1879-1955)	27
菊池芳文(1862-1918)	35, 161, 169, 172, 293, 295, 296, 302, 303, 480
菊池容斎(1788-1878)	36, 279
岸九岳(1845-1921)	246
岸竹堂(1826-97)	42, 46, 165
北大路魯山人(1883-1959)	65
北垣国道(1836-1916)	247, 248, 303
北澤楽天	323, 327, 344
北村鈴菜(1875-1924)	228
木村勘兵衛(1814-65)	128
清水六兵衛(四代)(1848-1920)	93, 94, 103, 105, 109, 116, 118
錦光山宗兵衛(七代)(1868-1927)	vi, 196, 455, 469, 470
九鬼隆一(1850-1931)	295, 303, 304, 522

國沢新九郎(1848-77)	4
久保田米麿(1852-1906)	35, 172, 245, 295
久米桂一郎(1866-1934)	56, 58
グラッセ, ウジェーヌ(1845-1917)	384~387, 393, 395, 396, 398
クレイン, ウォルター(1845-1915)	377
黒田重太郎(1887-1970)	79
黒田清輝(1866-1924)	6, 17, 56~58, 66, 74, 78, 176
黒田天外	xiv, 19, 59, 294, 388, 417~420, 424~442
迎田秋悦(1881-1933)	194
幸野棟嶺(1844-95)	161, 244, 245, 293, 295, 299, 303, 440
ゴーランド, ウィリアム(1842-1922)	277
児島虎次郎(1881-1929)	53, 54, 60
巨勢小石(1843-1919)	245
五姓田芳柳(1827-92)	319
コッホ, アレクサンダー	387
小波魚青(1844-1918)	xiii, 403~413
木島櫻谷(1877-1938)	x, xv, 27~50, 161, 480, 497
小林清親(1847-1915)	322
小林天風(徳太郎)	439
小堀鞆音(1864-1931)	31, 36, 412
小松均(1902-89)	65, 485
小山正太郎(1857-1916)	4, 5, 7, 318, 319
ゴンクール兄弟(兄エドモン1822-96、弟ジュール1830-70)	279
近藤徳太郎(1856-1913)	vi

さ行

酒井抱一(1761-1828)	300
榊原雨村	485
榊原始更(1895-1969)	485
榊原紫峰(1887-1971)	xiv, 484, 485, 487
榊原苔山(1890-1963)	485
榊原文翠(1824-1909)	246
佐久間文吾(1868-1940)	412
桜井忠剛(1867-1944)	78
佐倉常七(1835-89)	v
佐藤友太郎(1862-1940)	vi
佐野常民(1822-1902)	410

澤部清五郎(1884-1964) 79
 沢村専太郎(1884-1930) 77
 三田忠兵衛 128, 129
 椎原兵市(1884-1966) 393, 395, 396
 シーボルト, ハインリヒ・フォン
 (1852-1908) 273
 塩崎庄三郎(1871-1950) xiv, xv, 479~498
 芝千秋(1877-1956) 13, 169
 柴田是真(1807-91) 279
 霜鳥之彦(正三郎)(1884-1982) 79
 下村観山(1873-1930) 175
 下村玉廣(1878-1926) 228, 429
 松風嘉定(三代)(1870-1928) 554
 吹田草牧(1890-1983) 480
 杉浦非水(1876-1965) 78
 杉林古香(1881-1913) xi, 15, 21, 190, 191,
 193~195, 201~205, 208, 209, 211, 212,
 214~216, 218, 220, 222, 226, 229~233,
 235, 237, 366
 鈴木其一(1796-1858) 300
 鈴木松年(1848-1918) 35, 160, 161, 244
 鈴木瑞彦(1848-1901) 246
 鈴木馬左也 65, 66
 鈴木万年 299
 須田国太郎(1891-1961) 76, 77, 79, 91
 住友春翠(1883-1959) 551
 清風与平(1803-63) 113, 114, 455
 セギ, エミール・アラン
 385, 386, 388, 393, 396, 398

た行

高橋源吉(1860-1913) 5
 高橋由一(1828-94) 5, 6, 12
 高松長四郎 128, 129
 高山精華 485, 487, 488
 竹内栖鳳(1864-1942) xi, 21, 27, 48, 155
 ~161, 164~166, 169, 172~181, 259,
 293, 294, 303, 307, 429, 431, 462, 480~
 482
 竹内泰藏(1846-?) 246
 武田五一(1872-1938) ix, 8, 68, 77, 131,
 189, 194, 219, 340, 374~378, 380, 385,
 387, 390, 392, 393, 396, 398, 448, 456,

466, 470, 528, 531
 武田周次郎 xi, 135, 139~141, 143, 144
 伊達弥助(五代)(1839-92) vi
 田中喜作(1885-1945) 427
 田中善之助(1889-1946) 79
 田中利七(1846-?) 455, 469
 谷治三九(治作) 275
 谷口香嶠(1864-1915) xii, 160, 161, 169,
 172, 192, 194, 195, 197, 201, 204, 209~
 211, 216, 217, 221, 233, 259, 293~311,
 356, 375, 424
 田畑喜八(二代) 128
 田村宗立(1846-1918) 55, 78
 丹山陸郎(1853-97) vi
 千種掃雲(1873-1944) 169
 辻辰之助(松喬) 201, 233, 308, 364~366
 都路華香(1870-1931) 161, 172, 293, 433
 津田青楓(1880-1978) xi, 15, 190~194,
 196, 201~205, 208, 209, 211~216, 220,
 222, 226, 227, 229, 231~238, 293, 365,
 366
 土田杏村(1891-1934) 490
 土田麥(麦)僊(1887-1936) xiv, 178, 436,
 479, 480, 482, 485~487, 490~497
 土山観一 367
 鶴巻鶴一(1873-1942)
 131, 145, 147~151, 376, 466, 470
 デイ, ルイス・フォアマン(1845-1957)
 388
 寺崎広業(1866-1919) 171
 徳田隣斎(1880-1947)
 156, 160, 162~165, 172, 175, 179
 徳永鶴泉 169, 202
 戸鴛光孚(1882-1956) 194
 都鳥英喜(1873-1943) 77, 191, 390
 富岡鉄斎(1836-1924) 191, 300
 富田熊作 272, 280, 281, 284
 富田溪仙(1879-1936) 485
 富本憲吉(1886-1963) 79

な行

内貴甚三郎(1848-1926) 65, 246
 内貴清兵衛(1878-1955) 65, 66

内藤湖南(1866-1934)	65~67
中井宗太郎(1879-1966)	77, 427
中川重麗(1851-1917)	423
中澤岩太(1858-1943)	7, 8, 12, 16, 18, 19, 78, 79, 159, 162, 190, 194, 228, 320, 375 ~377, 380~383, 385, 388~390, 396, 398, 400, 424, 456, 459
中沢弘光(1874-1964)	78
中西安次郎	352
中村喜一郎(1850-1915)	xi, 126~128
中村弥二郎(1873-1944)	321, 323
夏目漱石(1867-1916)	191, 193
西川一草亭(1878-1938)	xi, 15, 189~191, 195, 196, 201~209, 212~214, 216~220, 222~224, 226~238, 366
西田音松	352
西田直二郎(1886-1964)	192
西堀一三(1903-1970)	192
西村五雲(1877-1938)	156~158, 160, 162, 165, 166, 179, 436
西村治兵衛(1861-1910)	356, 455
西村總左衛門(十二代)(1855-1935)	46, 356, 455, 469, 470
西山翠嶺(1879-1958)	156~158, 160, 162, 166~168, 171, 172, 174, 177, 179, 182
丹羽圭介(1856-1941)	448, 460, 464, 465~473
野長瀬晩花(1889-1964)	485
野村得庵(二代野村徳七)(1878-1945)	69

は行

萩原清彦	131, 376
橋本雅邦(1835-1908)	31, 35
橋本閔雪(1883-1945)	156, 157, 160, 162, 175, 176, 179, 480, 497
八田青翠(1882-1944)	156, 160, 162, 169, 175, 179
花井春水(1879-1928)	156, 158, 172
羽田亨(1882-1955)	66~68, 79, 80
浜岡光哲(1853-1936)	65, 470
濱田耕作(青陵)(1881-1938)	54, 72~77, 192
濱田篤三郎	274~277, 284, 286, 287

早川久兵衛	132
早川忠七	vi
林忠正(1853-1906)	9, 273, 284, 292
原在泉(1849-1916)	246
原田直次郎(1863-99)	412
菱田春草(1874-1911)	73, 74, 174
ビット・リバーズ(1827-1900)	277
広岡伊兵衛	356
平賀義美(1857-1943)	472
平山英三	198
廣瀬治助(1822-90)	xi, 132~134, 136
ビング, サミュエル(1838-1905)	11, 12, 15, 16
ブエ, アルバール	11, 12
フェノロサ, アーネスト(1853-1908)	176, 180, 295, 411
フェレッティ, プロスペロ(1836-93)	5
フォンタネージ, アントニオ(1818-82)	4~6, 21
深田康算(1878-1928)	65, 66, 71
福井松雄	152
福島建三	364, 365
福田豊四郎(1904-70)	485
福地復一(1862-1909)	198
藤井厚二(1888-1938)	68, 69
藤江永孝(1865-1915)	470
藤島武二(1867-1943)	57, 83, 317
藤平伸(1922-2012)	100
藤村岩次郎	470
フリーア, チャールズ・ラング(1854-1919)	277, 281
古谷紅鱗(1875-1910)	228, 229, 251, 375
星野空外(1888-1973)	485, 487, 488
堀川新三郎(1851-1914)	xi, 132~137, 141, 142
堀口捨己(1895-1984)	192
本多錦吉郎(1851-1921)	330, 412

ま行

前田正名(1850-1921)	275
牧野克次(1864-1942)	390
正岡子規(1867-1902)	9, 11, 17
正木直彦(1862-1940)	8, 192

松岡嘉兵衛 546, 547, 549
 松岡寿(1862-1944) 4, 5, 78
 松岡緑堂 412
 マッキントッシュ, チャールズ・レニー
 (1868-1928) 377
 松室重光(1873-1937) 200, 202, 209, 213,
 218, 220, 234, 521, 523, 527, 533
 松本亦太郎(1865-1943) 430, 433, 470
 馬淵喜兵衛 129
 間部時雄(1885-1968) 396
 三戸得一 470
 三宅克己(1874-1954) 13, 78, 319
 宮武外骨(1867-1955) 322, 344
 ミュシャ, アルフォンス(1860-1939)
 340, 377, 385, 386, 393, 395, 398
 向井寛三郎(1889-1958) 393, 395
 村上文芽 154, 420
 村上華岳(1888-1939) 65, 485
 元井三門里(1885-1989) 485
 森寛斎(1814-94) 34, 35, 161

や行

八木義助 144
 八木徳太郎(1898-1925)
 xi, 145, 146, 148~152
 安井曾太郎(1888-1955) 193
 柳宗悦(1889-1961) 94, 117
 山口貴雄(1865-1938) 472
 山田介堂(?-1924) 430
 山田直三郎
 195, 196, 198, 220, 221, 296, 303, 322
 山中吉郎兵衛 551, 552
 山中定次郎(1866-1936) 271, 560, 561
 山中與七 550~552
 山本覚馬(1828-92) 465
 山元春拳(1871-1933) 157, 160, 161, 172,
 259, 296, 303, 429, 430
 山本芳翠(1850-1906) 412
 湯浅久吉(1842-1901) 256
 横井時冬(?-1906) 305, 306
 横山大観(1868-1958)
 171, 172, 174, 175, 211, 249, 365
 吉岡宗次郎 352

吉田章三郎 276
 吉田忠三郎 480, 488, 491, 493
 吉田忠七(?-1874) v
 吉田彦六郎 470
 吉本平兵衛 128

ら・わ行

ラーキン, トーマス・J(1871-1928)
 xii, 271, 272, 274, 276~280, 284
 ローランス, ジャン・ポール(1838-1921)
 193, 319, 325
 ワーグマン, チャールズ(1832-91) 322
 ワグネル, ゴットフリート(1831-92)
 v, vi, 7, 189, 273, 380
 渡辺省亭(1851-1918) 279, 280

【事 項】

あ行

アート・アンド・クラフツ運動	388
アール・デコ	385
アール・ヌーヴォー	x, 8, 11, 16, 22, 189, 196, 205, 206, 213, 234, 307, 310, 317, 340, 341, 343, 398
浅見五郎助窯	107, 109, 115, 119
粟田口焼(粟田焼)	vi, 110~113, 455
アンダーソン・コレクション	273
池田合名会社	271, 276, 281, 284
池田コレクション	282
井野祝峰窯	107, 113, 114, 119
入江道仙窯(道仙化学製陶所窯)	109
ウィーン万国博覧会(1873年)	vi, 126, 273
写し友禅	xi, 125, 126, 131~136, 152
芸艸堂(山田芸艸堂)	13, 49, 159, 193, 195, 198, 213, 220~222, 231, 234, 235, 237, 296~298, 306, 307, 310~312, 318, 320, 322, 323, 325, 326, 331, 342, 343, 353, 366
《絵になる最初》	431
櫻谷文庫(公益財団法人櫻谷文庫)	27, 28, 31, 39, 44
応用画	vii, 244~246, 364
太田重染工株式会社	136, 137
大津絵	21, 206, 234
『オーナメントの組み合わせ』	377, 385, 386
小川文齋窯	109, 119
『織物標本帖』	134
恩賜京都博物館	95

か行

絵画協会共進会	164, 166, 172
『絵画叢誌』	187, 296
型友禅	132, 134
佳都美会・佳美会	197, 424, 425, 433, 435

河井寛次郎記念館	93, 106
川島織物	14, 371, 470
勸業課	246, 452, 465
勸業掛	v
勸業場	247
勸業基金	v
関西図案会	429
関西美術院	xii, xiii, 13, 71, 77, 192, 320, 337, 464
関西美術会	13, 65, 70, 78, 79, 81, 161, 162, 176, 433
寛次郎窯	99, 102, 103, 106~109, 117~119
煥美協会	295
機械捺染	xi, 125, 126, 134~141, 143, 144, 152
岸派	35, 42
九雲堂	15
京薩摩	vi
京式登り窯	93, 105, 106, 108, 112, 116, 119
京漆園	15, 20, 194, 197, 218, 293, 294, 424, 425, 459
京漆器	256
京染会	353
京染場	126
京都園芸会	460
京都織物会社	vi, 129
京都画壇	xi, 27, 35, 46, 48, 155, 157, 161, 174, 181, 184, 293, 429, 434, 440, 444, 462, 485
京都工芸繊維大学	10, 14, 21, 134, 140, 141, 162, 241, 366, 367, 374, 376, 377, 393
京都高等工芸学校	vii~ix, xiii, 6~8, 12, 13, 16, 19, 68, 71, 130, 131, 134, 145~148, 151, 152, 162, 189, 191, 194, 197, 206, 210, 213, 219, 221, 228, 229, 234, 240, 249, 258, 317, 320, 337, 340, 363, 365, 366, 373, 374, 376, 424, 425, 448, 454~456, 459, 470, 528
京都紺染組合	128
京都市絵画専門学校	39

京都市染織学校 146, 151
 京都市動物園(岡崎動物園) 39, 41, 42, 207
 京都市展 83
 京都市美術工芸学校(京都市立美術工芸学校) vii, xii, 32, 48, 68, 90, 169, 175, 178, 179, 193, 194, 197, 213, 218, 219, 221, 229, 233, 243~265, 293, 363, 364, 374, 425, 467
 京都商品陳列所 viii, xiv, 445~473
 京都市立芸術大学 309, 365, 480, 485, 486
 『京都図案』 355, 365
 京都図案会 198, 201, 202, 228, 229, 365, 429, 454, 455, 466
 京都染業取締所 128
 京都染工講習所 128, 129, 151
 京都茶染工組合 128
 京都帝室博物館 554, 558
 京都陶器会社 vi, 466
 京都陶磁器合資会社 99, 109, 111
 京都博覧会 vi, viii, 62, 302, 465, 466
 京都博覧協会 466
 京都美術協会 vii, 19, 176, 193, 197, 221, 295, 296, 299, 311, 351, 353~355, 420~426, 428, 434~436, 439, 441, 466
 京都美術倶楽部 272, 562
 京都府画学校 vii, xii, 55, 89, 243, 244, 248, 251, 265, 364
 『京都名勝記』 418
 京都窯業試験場 94
 競美会 194, 197, 424, 425, 432
 京焼 viii, 7, 93~95, 104, 106, 108~110, 112~114, 118~123, 272, 558
 京焼登り窯 108~110, 112, 113, 119
 去風流 190~192
 御苑内博覧会場 466
 起立工商会社 273, 279, 286
 『近代友禪史』 145, 146, 151, 353~355
 グラスゴー万国博覧会(1901年) 306, 376
 『芸術の日本』 12
 工芸図案科 vii, 197, 245, 252~256, 364, 375, 396
 『工芸図鑑』

xii, 296~299, 303, 305, 306, 310
 後素協会 35, 172, 433
 光風会 78, 83, 84
 工部美術学校 4, 5, 7, 17, 18, 318
 光琳会 202, 218
 『光琳百図』 20, 300
 光琳模様 225, 354
 国風(—イメージ/—文化) xiv, 160, 462, 519, 522~524, 526, 529~531, 533, 536, 537
 国民美術協会 62, 64, 65, 78, 87
 五条坂京焼登り窯 108~110, 112, 113, 119, 120, 123
 御所東南隅校舎 247~249
 『古制徴證』 296, 303~308
 古代模様 xii, 297~299, 303, 305~310, 355, 455
 『國華』 196, 218, 411
 『滑稽新聞』 322
 五二会 137~139, 466
 五二会京都綿ネル株式会社 137, 138
 古美術品展覧会 158, 229, 293, 435

さ行

薩摩焼 vi
 三脚会 70~72
 シカゴ万国博覧会(1893年) 280, 466
 自在画 68, 398
 『時事漫画 非美術画報』 xii, 317~344
 四宗 244, 247
 四条派 33, 35, 41, 46, 161, 164, 166, 173, 174, 191, 302, 389, 405, 482
 漆工科 193, 249, 253~256, 259~262, 264
 『室内装飾』 382, 387, 392, 393
 地引糊法 136
 「写生縮模帖」 x, 27, 28, 31~33, 40, 44, 48
 ジャカード vi
 『ジャパン・パンチ』 322
 ジャポニスム(日本趣味) 196, 273, 275, 279, 299, 341, 425, 523
 十一会 5, 17
 十八会 549~552
 商議員 246

彰技堂 4
 聖護院洋画研究所 13, 162, 320
 『小美術』 xi, 15, 19, 20, 189~191, 193~
 198, 201~204, 206, 208, 211~218, 220
 ~223, 226~228, 230~238, 322, 366
 小美術会 xi, 190, 194~196, 203, 217,
 218, 236, 293, 366
 如雲社 x, 34~36
 『植物とその装飾への応用』
 384, 385, 393, 395, 396
 『植物の芸術産業への応用』 385
 新古美術会 466
 新古美術品展 44, 45, 159, 161, 164, 170,
 193, 229, 293, 422, 435, 436
 新図案会 198
 新文部省美術展覧会(新文展) 82, 83
 『図按』 202, 213~215, 221, 355
 図案科 vii, ix, xiii, 8, 12, 13, 18, 19, 131,
 162, 189, 197, 198, 206, 210, 245, 252~
 259, 261, 264, 265, 308, 317, 337, 351,
 363~369, 374~377, 380, 383, 388~
 390, 396~398
 図案教育 3, 16~18, 219, 243, 246, 250
 ~352, 363, 374, 375, 388, 396
 図案奨励講演会 189, 190, 193~197,
 202, 204, 220~222, 229, 233, 237, 295,
 297~300, 304~306, 308, 310, 311, 322,
 342~344, 366, 368, 373, 374, 377~380,
 384~386, 390, 392, 393, 396~398
 図案集 xii, xiii, xv, 459
 図案精英会(京都図案会) 194, 198, 201,
 202, 228, 229, 365, 429, 454, 455, 466
 図案調製所 251, 375
 図案調製部 197, 251
 水彩画 3, 9, 13, 14, 21, 57, 73, 164, 165,
 279, 317~319, 326, 339, 344, 389, 391
 水曜会 xi, 155~169, 171, 172, 174~181
 国画創作協会 xiv, 155, 159, 440, 479,
 480, 482, 487, 489, 491
 墨流し染
 xi, 125, 126, 144~148, 150~152
 摺り友禪 132, 134
 舎密局 v, vi, 126, 127, 132

西洋画科 3, 6, 74, 264, 317
 セセッション 457
 全国古社寺宝物調査 295
 『染織大鑑』 366
 戦争画 83
 セントルイス万国博覧会(1904年)
 31, 259, 466, 522, 524, 529, 536
 『装飾資料集』 340, 386, 393, 395
 『装飾図集』 386
 『装飾の中の動物』 385, 393, 395
 『装飾の文法』 377
 染殿 vi, 126~128

 た行
 大典記念京都博覧会 62
 大日本図案協会 202, 213~215, 221
 大日本武徳会 xiv, 467, 519, 520, 524, 532
 太平洋画会 318, 319
 高島屋 vii, 15, 71, 77, 179, 193, 212, 294,
 351, 353, 356, 427, 469, 470
 武田商会 140, 142, 143
 千切屋 356
 竹杖会 157, 163, 169
 千總 31, 46, 132, 356
 《朝妝》 176
 『月瀬紀行 薫世界』 320
 帝国美術院 82, 319
 帝国美術院展覧会(帝展)
 27, 68, 78, 80, 82, 83, 319, 480, 497
 帝室技芸員 9, 279, 411
 手描き友禪 132
 デザイン教育 16, 180, 373, 389
 『デザインの基礎』 377
 『ドイツの芸術と装飾』 387
 東京帝室博物館 9
 『東京バック』 323, 334
 東京藝術大学 58, 159
 東京美術学校 vii, x, 3, 5, 6, 8, 17, 55~
 58, 60, 67, 74, 78, 161, 192, 198, 215,
 249, 250, 254, 256, 258, 317, 339, 365,
 373, 376, 378, 411
 道具商 543, 545~547, 549, 550, 554
 同攻会 157

陶磁器試験場 vii, 454, 455, 470
 陶磁器奨励会 vii
 『当世風俗五十番歌合』 320
 道仙化学製陶所
 xi, 108, 109, 114, 115, 119
 銅駝美術工芸高等学校 264
 動物画 28, 46, 166
 独立美術協会 78
 トリノ国際現代装飾美術博覧会(1902年)
 306
 な行
 内国勸業博覧会 vi~ix, 7, 31, 42, 46,
 158, 174, 194, 197, 198, 248, 410, 412,
 418, 449, 466
 西陣織 v, 7, 236, 342, 365, 469, 470
 西陣物産会社 v
 日英博覧会 259, 466~468
 日展 84, 92
 日本絵画協会 158, 164, 173, 174
 『日本漆工会雑誌』 441
 日本南画院 440
 日本美術院
 164, 169, 171, 174, 175, 178, 180, 211
 日本美術工芸会 426
 日本美術工芸社 426, 428, 430, 437
 『日本美術と工芸』 xiii, 417, 418, 421,
 426~435, 437~439, 441, 442
 『日本美術年鑑』 436, 437, 440
 農商務省 66, 193, 290, 310, 365, 446,
 452, 454~456, 459, 464, 472
 農商務省図案及び応用作品展覧会(農展)
 310, 459, 460
 は行
 白馬会 56, 57, 78, 317, 339
 白馬会洋画研究所 57
 バッタン vi
 『花とその装飾用途』 385, 393, 396
 波紋染 147~150
 原派 35
 「巴里消息」 9, 11
 パリ万国博覧会(1878年) 279

パリ万国博覧会(1900年) x, 16, 155,
 158, 161, 173, 174, 178, 180, 189, 190,
 306, 376, 387, 466, 469
 『美』 306, 428, 437
 東山大茶会 xiv, 552, 554~559
 美工会 297, 308
 『美術及美術工芸』 198, 221, 375
 美術織物 vi, 197, 220
 『美術海』 216, 322
 美術商 xii, xiv, 9, 12, 271, 272, 274, 275,
 277, 282, 284, 541, 543, 545, 547, 549,
 551, 552, 554, 556, 557, 559~565
 『美術真説』 411
 『美術新報』 56, 158, 214, 434, 437
 『美術壯観』 439
 『美術叢誌』 296
 『日出新聞』(『京都日出新聞』) 19, 49,
 130, 181, 191, 214, 228, 237, 281, 353~
 356, 358, 364, 388, 418~420, 429~432,
 434, 436, 439, 440, 455, 469, 555
 『非美術画業書』 321, 337, 343
 百選会 77
 日吉ヶ丘高等学校 264, 265
 『風俗画報』 329
 藤平製陶所 xi, 98, 99, 104
 藤平陶芸
 94, 98, 99, 101, 104, 109~111, 113
 藤平窯業
 98~105, 108, 109, 111, 112, 118, 119
 《武士山狩図》 10, 14
 不同舎 319
 武徳殿 xiv, 519~537
 平安遷都千百年記念祭 vii, 419
 丙午画会 169
 便化 20, 210
 『瓶史』 192, 230, 238
 便利堂 321~323, 343
 貿易品陳列館 446
 鳳凰殿 522
 『方寸』 428
 《戊辰之役之図》
 xiii, 403, 404, 410, 411, 413
 本田雲錦堂 193, 220, 222

ま行

蒔絵科	249
末糊	135
丸越組	275, 276
マルホフ式	387
『団団珍聞』	322, 327, 330, 333~336
円山派	35, 161
漫画	75, 76, 176, 283, 284, 317, 318, 320 ~322, 324~329, 331~333, 335, 336, 339, 344
民藝	xi, 93~95, 108, 117, 561
無名会	427
紫野洋画研究所	82
無隣庵	545, 546, 549, 555
『名家歴訪録』	309, 419, 430, 439
明治美術会	5, 17, 317
朦朧体	174
モスリン友禪	133, 134, 136
森派	35
文部省美術展覧会(文展)	10, 14, 27, 30 ~32, 62, 64, 82, 83, 159, 168, 179, 319, 431, 433~436, 464, 481, 488, 491, 497
文部省博覧会	viii
文部省戦時特別美術展覧会	92

や行

山中商会	xii, 271, 272, 275, 284
------	-------------------------

友禪協会	xiii, 198, 351, 352~358, 360, 362~364, 366~368
『友禪図案』	198, 351, 352, 356, 364, 366~368
友禪染	viii, 125, 132, 133, 236, 351~353, 364
遊陶園	vii, 15, 20, 197, 293, 310, 424, 425, 459, 473
輸出陶器	vi, 196
友禪図案会	vii, 198, 351, 352, 356, 364

ら行

洛陶会	554~558
理化学陶磁器	104, 108, 115, 119
龍池画塾	38, 39
臨時全国宝物取調局	411
琳派	197, 205, 206, 211, 213, 225, 227, 230, 234, 278, 300, 302, 377
『黎明』	xi, 159~165, 178
歴史画	xii, 36, 39, 169, 173~175, 178~ 180, 293, 311, 375, 403, 408, 410~413
藟纈	147, 148
ローラー捺染機	125, 134, 136, 140
ロンドン万国博覧会(第2回、1862年)	275

“HISTOIRE de L'ART du JAPON” 16

The Fine Arts and Crafts of Modern Kyoto: Production, Distribution, and Appreciation (Abstracts)

I. Production

Asai Chū and Paris: Examining the Career Change of a Modern Japanese Artist

Namiki Seishi (Director, Kyoto Institute of Technology Museum and Archives; Japanese Art History)

While attending the Paris Exposition in 1900, Asai Chū (1856–1907) decided to accept an offer to become an instructor at the Kyoto College of Technology. During his years in Kyoto, he continued to produce Western-style paintings, but at the same time, he transitioned to nihonga, or Japanese-style painting, and primarily made sketches and watercolors. Asai's career change has often been attributed to his increased interest in teaching sketching though it may have been due to a sense of despair he felt towards Western-style painting. This paper attempts to understand the reason for Asai's career change and analyze *Warrior Hunting Scene*, one of his masterpieces from his time in Kyoto.

The Sketchbooks of Konoshima Ōkoku: The Training and Production of Japanese Painting in Meiji-period Kyoto

Sanekata Yoko (Curator, Sen-oku Hakuko Kan Museum; Japanese and East Asian Art History)

Konoshima Ōkoku (1877–1938) was a central figure in the Japanese painting scene in Kyoto from the latter half of the Meiji (1868–1912) to the early Shōwa period (1926–1989). Of the 600 sketchbooks he created (now owned by Oukoku Bunko Foundation), most date from his teenage years up to his twenties. These sketches, which the artist valued throughout his life, and evidence of his study of Western-style and early East Asian paintings present a vivid picture of his career. Through his sketchbooks, an aspect of the process of training Japanese painters in Kyoto from the mid-1890s to the 1900s will be explored.

The Painting Career and Life of Ōta Kijirō

Ueda Sayoko (Curator, The Museum of Kyoto; Modern Japanese Art History)

Ōta Kijirō (1883–1951) was a leading figure in the Western-style painting circles of modern Kyoto. He entered the department of Western painting at the Tokyo School of Fine Arts in 1903 and after graduating in 1908, he went to Europe to study painting in Belgium. In 1913, he returned to Japan, where he had an illustrious career as an artist. This paper explores the stylistic changes of the artist after his return to Japan, his strong interest in archaeology, and his exchanges and friendships with various contemporaneous painters and specialists from the precursors of the Kyoto City University of Arts and of Kyoto University.

Kawai Kanjirō and the Manufacturing System of Kyoto Ware: The Significance of “Inheriting” the Tradition of Climbing Kilns

Kidachi Masaaki (Professor, Ritsumeikan University; Japanese Archaeology)

Kawai Kanjirō (1890–1966) built a climbing kiln to produce *Kyōyaki*, or “Kyoto ware”, in the Gojōzaka district of Kyoto, and although he became a leading figure in the Mingei movement, he continued to make Kyoto ware in his kiln in Kyoto. Mingei and Kawai’s works may appear to differ the more refined Kyoto ware, however, the manufacturing system was significant to Kawai and the Kyoto ware potters. The documents of the Dōsen Scientific Ceramic Manufacturing Kiln Site and Fujihira Ceramics shed light on the manufacturing system of the Kyoto ware climbing kilns in Gojōzaka, which had previously not been fully recognized in studies on Kyoto ware and Mingei.

The Modernization of Textiles in Kyoto: The Techniques of *Utsushi Yūzen*, Machine Prints, and Marbling

Aoki Mihoko (Associate Professor, Kyoto Women’s University; History of Japanese Clothing)

During the Meiji period (1868–1912), the Japanese government implemented policies to encourage industries and promote an industrial revolution. Under the adverse circumstances of the Emperor moving to Tokyo, which also continued to be the capital, Kyoto’s industries actively embraced these initiatives. Among these industries were the textiles manufacturers,

who developed *utsushi yūzen*, a tracing technique, in the early Meiji period that allowed for the efficient production of vibrant *yūzen*-dyed kimonos. The introduction of machine printing from the West in the latter part of the Meiji period also resulted in the large production of kimono for the masses. In addition to mass production, the technique of “marble dyeing” (*suminagashi zome*), which incorporated an early marbling technique into new styles of Kyoto dyeing for kimono, was devised. This paper examines the modernization of such dyeing techniques.

A Study of the Wednesday Society: New Trends by Takeuchi Seihō’s Pupils in the Latter Half of Meiji 30s

Ueda Aya (Lecturer, Kwansei Gakuin University and Doshisha Women’s College of Liberal Arts; Modern Japanese Art History)

The Suiyōkai or “Wednesday Society”, was a study group formed by several young artists who studied under Takeuchi Seihō (1864–1942). During the latter half of Meiji 30s (1903–1907), they held five exhibitions, published the art journal *Reimei* (The Dawn of a New Age), and had other noteworthy activities. However, very little research has been done on this group until now. Taking the artworks and Western artbooks brought to Japan by Seihō, who saw the Paris Exposition in 1900, as teaching materials and references, this paper sheds new light on the activities of the Wednesday Society, which aspired to create a new style of Japanese painting, and investigates the group’s significance.

The Design Journal *Shōbijutsu* (The Minor Arts): An Analysis and the Role of Nishikawa Issōtei

Wada Tsumiki (Assistant Research Staff, Kyoto University Museum; Modern Japanese Art History)

In 1904, Nishikawa Issōtei, Tsuda Seifū, and Sugibayashi Kokō created a design study group and compiled a design journal entitled *Shōbijutsu* (The Minor Arts), which was published by Unsōdō Corp. in Kyoto. This paper focuses on the role of Nishikawa Issōtei, who practiced the art of flower arrangement, and analyzes the goals and significance of this publication.

The Curriculum of the Former Kyoto City School of Fine Arts and Crafts

Matsuo Yoshiki (Curator, Kyoto City University of Arts University Art Museum; Japanese Cultural History)

Unable to fulfil industrial expectations with its initial curriculum, the Kyoto Prefectural School of Painting (Kyōto-fu Gagakkō), which opened in 1880, gradually established a major for students to study *Zuan*, or design patterns. Combining its existing Japanese painting courses with *Zuan* courses for its curriculum, the school changed its name to the Kyoto City School of Fine Arts and Crafts (Kyōto Shiritsu Bijutsu Kōgei Gakkō) [in 1901]. In the midst of change from the Meiji to Taishō to Shōwa eras, this institution served as an important vocational school, where artists lived together and played a major role in the fine arts and crafts of Japan. This study looks at the school's curriculum for technical and professional training and its role.

II. Distribution

The Dawning of Art and Trade in Kyoto and London: The Art Dealers Ikeda Seisuke and Thomas J. Larkin

Yamamoto Masako (Lecturer, Department of Literature, Ritsumeikan University; Japanese Cultural History)

During the Meiji period, the art dealers Ikeda Seisuke I (1838–1900) and his son Ikeda Seisuke II attempted to enter the overseas art market. Their ventures and setbacks as well as the Japanese art research conducted by their partner Thomas J. Larkin in London are examined here. This study situates their roles in the research of Japanese art history, and especially in the reception of Japanese art outside Japan.

The Publication of Taniguchi Kōkyō's Reproductions and Collected Works

Fujimoto Manami (Curator, The Museum of Modern Art, Wakayama; Modern Japanese Art History)

Known as a Japanese history painter, who was active in Kyoto from the mid-Meiji to early

Taishō periods, Taniguchi Kōkyō (1864–1915) was considered one of the “Four Heavenly Kings amongst the pupils of Kōno Bairai” by artists such as Takeuchi Seihō. At the same time, he also created a variety of applied artworks, *Zuan* (design pattern). While Kōkyō was considered equal to Asai Chū, Kamisaka Sekka, and other artists who were also leading designers of *Zuan* in modern Kyoto, he also played an important role that differed from the others such as publishing *Zuan* books of ancient artifacts. An analysis of his career as *Zuan* researcher reveals aspects of traditional Japanese applied arts in modern Kyoto.

Caricature and *Zuan* (Design Pattern) as seen in the Magazine *Jiji manga hibijutsu gabō*

Maekawa Shiori (Specially Appointed Faculty, International Research Center for Japanese Studies; Modern Japanese Art History)

The Western-style painters of the Meiji period often created non-Western works. For example, Asai Chū and Kanokogi Takeshirō (1874–1941), who were active in the Western-style painting scene in Kyoto, created humorous illustrations for the magazine *Jiji manga hibijutsu gabō* (Non-artistic Pictorials of Current Events). Considered here are the magazine’s distinctive aspects and intentions through satirical magazines, picture postcards, *Zuan* (design pattern) books, and other forms of visual media at the time.

Developments in Dye Designs from Meiji-period Kyoto: Examining the Yūzen Association’s *Zuan* Competition

Kamo Mizuho (Special Researcher, Japan Society for the Promotion of Science; Cultural History of Clothing and Textile Design)

Zuan, or design patterns, came to be solicited during the mid-Meiji period, and in 1892, the Yūzen Association, which has been considered to be the first *Zuan* group in Kyoto, began a *Zuan* competition. Until now, little has been studied about this organization and its surrounding circumstances. While presenting the development of *Zuan* from the mid to late Meiji period and the interactions between the Yūzen Association and the educational institutions for *Zuan* in Kyoto, this paper reexamines the position of the Association through the existing *Zuan* entries.

The Introduction of Western Designs in an Educational Institution in Meiji-period Kyoto: Focusing on Design Books

Oka Tatsuya (Assistant Professor, Kyoto Arts and Crafts University; History of Modern Design and Graphic Design)

Asai Chū and Takeda Goichi, two of the earliest instructors at the Kyoto College of Technology (now Kyoto Institute of Technology), actively introduced Western European design to this school, which was founded in 1902. This can also be seen in the references purchased for educational purposes by the design department at the time. This paper focuses on *Zuan* (design pattern) books from among these materials and explores their practical use in education.

III. Art Appreciation

Konami Gyosei's *Boshin War* painting and Views on the Meiji Restoration

Takagi Hiroshi (Professor, Institute for Research in Humanities, Kyoto University; Modern Japanese History)

With the promulgation of the Meiji Constitution in 1889, the Emperor pardoned the rebel army of the Boshin War, resulting in the freedom to express the experiences of the Meiji Restoration. In the following year, Konami Gyosei exhibited his historic masterpiece, *Boshin War*, at the third Domestic Industrial Exposition, which was held at Ueno in Tokyo. In the painting, Gyosei captured the chaotic night scene of the outbreak of the Toba-Fushimi Battle on January 1868. As a retainer of the Uwajima domain, he depicted the Meiji Restoration from the perspective of his domain, whose men served as guards of the Imperial Palace in Kyoto. This paper introduces Gyosei's *Boshin War*, an early historical Japanese painting, which was discovered by the Hoshino Art Gallery .

The Fine Arts and Crafts of Modern Kyoto through Journals: Kuroda Tengai's *Nihon bijutsu to kōgei* (Japanese Fine Arts and Crafts)

Nakao Yui (Curator, The National Museum of Modern Art, Tokyo; History of Crafts)

As a journalist of the newspaper *Kyoto Hinode Shimbun* (precursor of *Kyoto Shimbun*), Kuroda Tengai contributed editorials on the fine arts and crafts. Later, he edited an art journal entitled *Nihon bijutsu to kōgei* (Japanese Fine Arts and Crafts). This paper introduces this little-known publication and examines the characteristics of Kuroda's activities as an art critic. Also explored here is the significance of the publication of *Nihon bijutsu to kōgei* through a comparison of other contemporaneous art journals published in Kyoto and Tokyo.

The Kyoto Commercial Museum and the Fine Arts and Crafts in Late Meiji-period Kyoto

Miyake Takuya (Assistant Professor, Kyoto Institute of Technology; Architectural History)

The Kyoto Commercial Museum (Kyoto shōhin chinretsujo) in 1909 was part of a nationwide trend to establish “exhibition venues” across Japan, however, the emphasis placed on the fine arts and crafts, and gardening in Kyoto, was unparalleled compared to other regions. In the backdrop of this was the close connection between industry and educational institutions that promoted the idea of government and people as a single body in the Meiji period. This study investigates the activities of the Kyoto Commercial Museum and those affiliated with it and reveals the role that this Commercial Museum played in the fine arts and crafts of modern Kyoto.

The Construction of Tsuchida Bakusen's Studio and the Lumber Dealer Shiozaki Shōsaborō

Tajima Tatsuya (Professor, Kyoto City University of Arts; Japanese Art History)

The Kyoto City University of Arts has over three hundred letters concerning the exchanges between the lumber dealing Shiozaki family in Shingū city in Wakayama prefecture and various artists. Especially noteworthy are the letters from Tsuchida Bakusen (1887–1936),

Ono Chikkyō (1889–1979), and Sakakibara Shihō (1887–1971). Prior to founding the Kokuga Sōsaku Kyōkai (Society for the Creation of a National Painting Style), these artists had planned the construction of ateliers, which would provide a better work environment, and commissioned the lumber for this from Shiozaki Shōsaburō. This study pursues the various exchanges, even concerning architecture, while taking into consideration the relationship between this patron and the artists at the time.

The Construction of the Butokuden (Martial Arts Hall) and the Influence of National Image

Nakagawa Osamu (Professor, Kyoto Institute of Technology; Architectural History)

The Butokuden, or Martial Arts Hall, in Kyoto is a modern Japanese-style building that became a model for other martial arts training centers that became widespread throughout Japan. However, in the Taishō period, a large-scale addition was made to the structure and the northern entranceway, which differed in design from the existing sections, and a magnificent cusped gable were added. The “Momoyama style”, which had spread during this time in the areas of architecture and public works, can be seen in there.

Thoughts on Venues for Tea Gathering

Yagasaki Zentaro (Associate Professor, Kyoto Institute of Technology; Architectural History)

Records of tea gatherings (*chakaiki*) and illustrated catalogues of tea gatherings (*meien zurōku*) provide a wealth of information in tracing changes in tea gatherings (*chakai*) from the early modern to the modern eras. The activities of tea practitioners and art dealers also shed light in understanding the processes in which the performing art of tea gatherings assumed the characteristics of venues for art appreciation.

(Translated by Maya M. Hara)

執筆者紹介（掲載順）

並木 誠士（なみき・せいし）

1955年生 京都工芸繊維大学教授・同大学美術工芸資料館長 日本美術史

おもな著書等に『日本絵画の転換点 酒飯論絵巻—「絵巻」の時代から「風俗画」の時代へ』（昭和堂、2017年）、『絵画の変—日本美術の絢爛たる開花』（中央公論新社、2009年）、『図案からデザインへ—近代京都の図案教育』（松尾芳樹・岡達也と共著、淡交社、2016年）、『美術館の可能性』（中川理と共著、学芸出版社、2006年）、『京都 近代美術工芸のネットワーク』（青木美保子と共編著、思文閣出版、2017年）など

実方 葉子（さねかた・ようこ）

1969年生 泉屋博古館学芸課長 日本・東アジア絵画史

おもな著書等に『フルーツ&ベジタブルズ—東アジア蔬果図の系譜』（編著、泉屋博古館、2018年）、『木島櫻谷—近代動物画の冒険』（執筆、泉屋博古館編、2017年）、『典雅と奇想—明末清初の中国名画』（板倉聖哲・野地耕一郎と共編、東京美術、2017年）など

植田彩芳子（うえだ・さよこ）

1975年生 京都文化博物館学芸員 日本近代美術史

おもな著書等に『明治絵画と理想主義—横山大観と黒田清輝をめぐって』（シリーズ近代美術のゆくえ）（吉川弘文館、2014年）、『煥美協会考—フェノロサ講演の余波』（森光彦編『明治150年記念企画展 京都画壇の明治』展図録、京都市学校歴史博物館、2018年）、『小川千麿筆《西洋風俗大津絵》の史的 position』（『美術フォーラム21』第36号、2017年）など

木立 雅朗（きだち・まさあき）

1960年生 立命館大学文学部教授 日本考古学

おもな著書等に「京式登り窯の築窯・修復・改造」（佐々木幹雄・齋藤正憲編『やきもの つくる・うごく・つかう』近代文藝社、2018年）、「京都の土と窯—発掘現場からみた伝統工芸と京都の土と石の関係」（『立命館文学』第649号、2017年）、『京都イメージ—文化資源と京都文化』（日本文化デジタル・ヒューマニティーズ シリーズ05）（富田美香ほかと共編著、ナカニシヤ出版、2012年）など

青木美保子（あおき・みほこ）

1960年生 京都女子大学准教授 日本服飾史

おもな著書等に『京都 近代美術工芸のネットワーク』（並木誠士と共編著、思文閣出版、2017年）、『京都 伝統工芸の近代』（並木誠士ほかと共著、思文閣出版、2012年）、『近代京都における捺染産業の発展—ロール彫刻業に注目して』（『風俗史学』第65号、2017年）など

上田 文（うえだ・あや）

1964年生 関西学院大学非常勤講師、同志社女子大学非常勤講師 日本近代美術史

おもな論著に「土田麥僊の人物画について—肖像性と象徴性をめぐる考察」（『デザイン理論』第62号、2013年）、「内昌暁園について—近代京都画壇から見た画業」（『鹿島美術研究』年報27号別冊、2010年）、「土田麥僊『平牀』と『妓生の家』について—近代日本美術における朝鮮の美をめぐって」（『美学』第233号、2008年）など

和田 積 希 (わだ・つみき)

1980年生 京都大学総合博物館博物館研究員 日本近代美術史

おもな著書等に『京都工芸繊維大学美術工芸資料館デザインコレクション3 日本のポスター』(並木誠士と共著、青幻舎、2018年)、『京都 近代美術工芸のネットワーク』(青木美保子・並木誠士編、共著、思文閣出版、2017年)、「新出の「野分文庫」について—浅井忠の図案とその作品化をめぐる—」(『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』第650号、2014年) など

松尾 芳 樹 (まつお・よしき)

1959年生 京都市立芸術大学芸術資料館学芸員 日本文化史

おもな著書等に『図案からデザインへ 近代京都の図案教育』(岡達也・並木誠士と共著、淡交社、2016年)、『名画探訪—墨絵京都ふたり旅』(日貿出版社、2003年)、『京の絵手本—円山四条派の画法』上・下 (日貿出版社、1995年) など

山本真紗子 (やまもと・まさこ)

1979年生 立命館大学文学部授業担当講師 日本文化史

おもな著書等に『唐物屋から美術商へ—京都における美術市場を中心に』(晃洋書房、2010年)、『MADE IN JAPAN 日本の匠—世界に誇る日本の伝統工芸』(前崎信也と共編著、IBCパブリッシング、2018年)、「美学者中井宗太郎の渡欧体験(1922~23)—京都市立芸術大学芸術資料館所蔵中井宗太郎資料を中心に」(京都大学人文科学研究所『人文学報』第110号、2017年) など

藤本真名美 (ふじもと・まなみ)

1987年生 和歌山県立近代美術館学芸員 日本近代美術史

おもな著書等に「国画創作協会創立をめぐる—京都の周辺人物を中心に」(笠岡市立竹喬美術館・和歌山県立近代美術館・新潟県立万代島美術館編『創立100周年記念 国画創作協会の全貌展』図録、2018年)、「国画創作協会、大阪茶話会が生まれた時代」(『美術フォーラム21』第37号、醍醐書房、2018年)、「谷口香嶮と京都の歴史画」(森光彦編『明治150年記念企画展 京都画壇の明治』展図録、京都市学校歴史博物館、2018年) など

前川 志 織 (まえかわ・しおり)

1976年生 国際日本文化研究センター特任助教 日本近代美術史

おもな著書等に『博覧会絵はがきとその時代』(高橋千晶と共編著、青弓社、2016年)、「チョコレートのおもちゃとしての「少女」—1930年代における雑誌『少女の友』森永チョコレート広告をてがかりに」(『デザイン理論』第70号、2017年)、「都市新中間層にとつての『でろり』—1922年岸田劉生個人展覧会における麗子像の展示を中心に」(『美学』第58巻第3号、2007年) など

加 茂 瑞 穂 (かも・みずほ)

1983年生 日本学術振興会特別研究員 服飾文化史、染織意匠

おもな著書等に『掌のなかの図案—近代京と染織図案 II』展図録(岡達也と共編著、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2018年)、「型紙コレクションのデジタル・アーカイブとその効用」(『アート・ドキュメンテーション研究』第22号、2015年)、「歌舞伎衣裳の変遷とその視覚的な工夫について—『妹背山婦女庭訓』四段目お三輪を例として」(『歌舞伎 研究と批評』第46号、2011年) など

岡 達也（おか・たつや）

1982年生 京都美術工芸大学助教 近代デザイン史、グラフィックデザイン

おもな著書等に『図案からデザインへ 近代京都の図案教育』（並木誠士・松尾芳樹と共著、淡交社、2016年）、『京都 近代美術工芸のネットワーク』（青木美保子・並木誠士編、共著、思文閣出版、2017年）など

高木博志（たかぎ・ひろし）

1959年生 京都大学人文科学研究所教授 日本近代史

おもな著書等に『近代天皇制と社会』（編著、思文閣出版、2018年）、『近代天皇制と古都』（岩波書店、2006年）、『近代天皇制の文化史的研究—天皇就任儀礼・年中行事・文化財』（校倉書房、1997年）など

中尾優衣（なかお・ゆい）

1981年生 東京国立近代美術館主任研究員 工芸史

おもな著書等に『うるしの近代—京都、〈工芸〉前夜から』展図録（牧口千夏と共編著、京都国立近代美術館、2014年）、「澤田宗山に関する一試論—図案集を手がかりに」（『CROSS SECTIONS（京都国立近代美術館研究論集）』第8号、2017年）、「雑誌にみる近代京都の漆芸—『日本漆工芸雑誌』を中心に」（『CROSS SECTIONS（京都国立近代美術館研究論集）』第7号、2015年）など

三宅拓也（みやけ・たくや）

1983年生 京都工芸繊維大学助教 建築史

おもな著書等に『危機の都市史—災害・人口減少と都市・建築』（「都市の危機と再生」研究会編、共著、吉川弘文館、2019年）、『大名庭園の近代』（小野芳朗・本康宏史と共著、思文閣出版、2018年）、『近代日本〈陳列所〉研究』（思文閣出版、2015年）など

田島達也（たじま・たつや）

1964年生 京都市立芸術大学教授 日本美術史（近世・近代絵画史）

おもな論文に「『平安人物志』を読む」（京都文化博物館編『京の絵師は百花繚乱—『平安人物志』にみる江戸時代の京都画壇』展図録、1998年）、「『平安画家評判記』について」（『美術京都』第43号、2012年）など

中川 理（なかがわ・おさむ）

1955年生 京都工芸繊維大学教授 建築史

おもな著書等に『近代日本の空間編成史』（編著、思文閣出版、2017年）、『京都と近代—せめぎ合う都市空間の歴史』（鹿島出版会、2015年）、『風景学—風景と景観をめぐる歴史と現在』（共立出版、2008年）、『重税都市—もうひとつの郊外住宅史』（住まいの図書館出版局、1990年）など

矢ヶ崎善太郎（やがさき・ぜんたろう）

1958年生 京都工芸繊維大学准教授 建築史

おもな著書等に『庭と建築の煎茶文化—近代数寄空間をよみとく』（尼崎博正・麓和善と共編著、思文閣出版、2018年）、『描かれた都市と建築』（並木誠士編、共著、昭和堂、2017年）、『茶湯古典叢書 五 茶譜』（谷晃と共著・校訂、思文閣出版、2010年）など

きんだいきょう と びじゅつこうげい
近代 京都の美術 工芸
—— せいさく りゆうつう かんしょう
制作・流通・鑑賞 ——

2019（平成31）年3月29日発行

編者 並木誠士

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-533-6860(代表)

装 幀 岡達也

印 刷 株式会社 図書印刷 同朋舎
製 本

© Printed in Japan

ISBN978-4-7842-1938-4 C3072